



鎌倉の猫事情
第三十七話

COLUMN

あの夜の事件・・・それは、事実上グーニーと灰色猫との最後の闘いでした。その夜のグーニー一家の団欒は、宿敵である灰色猫が窓辺へ姿を現したことで破られました。いつものようにグーニーとスイーピー、それに子供たちがくつろぐ部屋の窓越しに、一家の様子を伺っていた灰色猫が、不気味な黒い影を映して忍び寄っていたのです。その影はグーニーを嘲笑い、挑発するように窓辺に立ちただかりました。鬼気迫る気配に私が窓を開くと、グーニーは、夜の闇を背に立ちただかる灰色猫を見すえ、ゆっくりと起き上がり、窓辺の敵を越えて、ひらりと屋根の上へ飛び降りました。見ると、暗い屋根の上で一定の距離を保ちながらグーニーと灰色猫が鼻に皺をよせ、低く唸りあいながら、じりじりと右へ左へと移動しながらお互いの隙を伺って向かいあっています。丸い大きな顔を持ち上げてグーニーを見つめる灰色猫と、真っ黒い顔でそれを見上げるグーニー。灰色猫は今夜こそ敵の最後の息の根を止める確信に満ちているように見えました。確かに灰色猫は優勢でした。その時までは、グーニーの方に目をやると、彼の目に覚悟が現われたように見えました。興奮した両目に怒りをみなぎらせ、両足をふんばって自分よりひと回りも大きな宿敵に最後の決戦を挑もうとしていたのです。2匹が互いにもう一度相手を見、身構え直した時、部屋で弟とこの成り行きを見守っていたすみれが、突然白く華奢な体で屋根の上に飛び降りました。そして彼らの様子を見、静かに灰色猫の背後に廻ったのでした。すみれもまた、敵の背中から一定の距離を保ちながら頭を低く下げ、油断なく彼らの様子を伺っています。その様子におとなしく気の優しいクウまでもが、おそろおそろ窓辺へ顔を出しました。そしてゆっくり屋根へ降り、今度は援護する形でグーニーの後ろに廻りました。思いがけない彼らの援軍に、進路も退路も絶たれた形の灰色猫、さすがに驚いた様子です。グーニーとにらみ合いながらも、背後に廻ったすみれをしきりと気にしています。どのくらいにらみ合いが続いたでしょう。そしてついに、屋根の上の緊張が頂点に達し、灰色猫が意を決して、グーニーに飛び掛ろうと顔を上げた瞬間、まさにその時、大きな物音と共に誰より早く彼に飛び掛ったのは、それまで部屋の中で知らぬ顔で寝ていたスイーピーだったのです。しなやかな白い影に不意をつかれた灰色猫は不覚にも一瞬のうちに体勢を崩し、それを合図に、4匹の家族と敵猫は奇声を上げ、もつれあいながら、音を立てて屋根を転がり落ちていくのが見えました。

その夜の闘いの結果は見るまでもなかったでしょう。

その後、灰色猫は姿を見せる事はありませんでした。

グーニーは自らの勇気と一家団結によって、勝利と平安を取り戻したのです。今でも、夜になると、遠い目をして夜空を見つめていることがあります。

グーニーくんの胸に、あの晩の出来事が去来するのでしょうか。

to be continued



Past

遠い昔のこと

少女はひしゃげた窓の中から、雲ひとつなく黒く晴れ上がった夜空に浮かぶ月を見上げた。キラキラ瞬くたくさんの星を従えて、白く輝く丸い月はそっけないくらい高い所にいる。少女には、到底手がとどきそうにもない。それでも月は少女の「部屋」に、明るい光をそそいでいる。少女の隠れ家であるこのビルは、もうとうに崩れ始めていた。全体が少しずつ傾いてきて、その中の、もとは1階だったが今ではほとんどが地下室のようになってしまった部屋が、彼女のたったひとりの住まいである。少女は白い月を見上げながら思った。『今から、ずっと前にも...私が生まれる前、50年も前にも、この、この場所から、こうしてひとりで月を見上げた女の子がいたかしら?』まだこんな廃墟になるずっと前...それから、そのもっと前、100年前にも、300年前にも、千年くらい前にも、ここからひとり月を眺めていた女の子がいたのだろうか。少女はひとり考えているうちにそう確信した。その子達もきっと寂しかっただろう。少女は、千年前のこの場所を思った。きっとここは山の中で、きっと森の中で、そして少し離れたところにはきれいな泉があって、森のなかは風が吹くと色々な音がしただろう。木々がざわざわとざわい、突然嘴の鋭い鳥が叫ぶのが聞こえたかもしれない。今だって、この部屋の中にいると色々な音がする。風の強い晩には、ビルの中の壊れた配管に風が吹き込んで、笛みたいにひゅうひゅう鳴らしたり、建物のどこかが、何かの拍子に壊れ落ちて、その欠けらが落ちる音がビルの中に閉じ込められてあちこちに反響して、いつまでたっても、カラカラ音が鳴り止まないこともある。慣れっこだけど、やっぱりほんの少し怖い時もある。きっと千年前のその少女も心細い夜があっただろう。可哀想に.....そう考えると少女は少しほっとした。かなり広いこの部屋を振り返って見渡すと、四方の壁のうちの二つは沈みかけている天井を支えきれず、いびつな四辺形になって、パースペクティブがきいてやけに広く見える。ドアはもうとくに開かなくなっている。ドアの横の壁には、額に入った一枚の古ぼけた写真が傾いたまま掛けられている。月の光は部屋の隅々まで差し込んで、昼間のように明るくなった。今夜の月の光は、少女の過ぎ去った楽しい思い出までも、真っ白に照らしているようだ。少女は、冷たい床の真ん中に顔を埋めて座り込んだ。月は斜めに傾いて、小さくなった少女の体を白い光で包んでいた。

